

## 発言者が誰であろうと、誤っていると思ったら

附属図書館長  
立花 希一

「大学を卒業して社会に出る」という言葉を耳にしますが、少し奇妙です。大学も社会ですし、一般社会と同様、政治や権力、上下関係とも無縁ではありません。しかしながら、大学社会は、一般社会と異なる点があります。大学の目的の一つは真理の探求です。そのための教育研究活動では、学生と教職員の区別はなく、自由と平等が保障されています。例えば、益川・小林のノーベル賞受賞者を輩出した名古屋大学物理学教室の憲章（1946年制定）では、「何人の発言も自由である」と謳われ、自由闊達な議論の伝統があるそうです。

ところが、一般社会では、部下は上司の指示・命令に従えとされる職場が見受けられます（この上意下達の徹底した組織が軍隊や官僚制です）。このような職場では、「イエスマン」や、その逆の「面従腹背」といった後ろ向きの態度が生まれがちです。

卒業後は、自由や平等が当然だった大学より不自由で不平等な組織の現実直面するかもしれません。しかし、どんな組織においても、発言者が誰であろうと、発言内容に注目し、一個の自律的な人間として、真偽、善悪、正邪に照らして批判的に検討し、もしその内容に誤りがあると判断したら、率直に意見し議論できる人物が望ましいでしょうし、実は組織も、このような人物を必要としているはず（古代アテネに生きて死んだソクラテスはまさにそうした人物でした）。

もし私の発言に興味をもってくださったのなら、手始めとして、この発言内容を批判的に検討し、さらに自分の考えを深化させていただければ幸いです。